

みんなで築こう 素晴らしい竹田市 What a wonderful world!

土居昌弘の大分県議会議員活動報告

羽ばたき

ともに輝く
社会づくり



平成23年
新春号

編集：土居昌弘を育てる会編集部 発行：土居昌弘
土居昌弘連絡事務所 〒878-0005 竹田市挾田670番地
TEL 62-4848 FAX 63-0124
<http://www.doi-masahiro.jimusho.jp/>

農村のおもてなしを — 来ちよくれ竹田研究会



久住の「森のぐらんこ」で食事会

今、竹田市の農村が元気になってきています。自分の家を宿として、多くの人々を招き入れ、そこでの交流を通じて皆さんが元気になっているのです。

竹田市と大分県は、グリーンツーリズムを推進させ、農村地域が活性化していくように、農家民泊ができる農家の方々を支援。農家民宿を開業するまでの指導や、先進地への研修、さらには勉強会・シンポジウムの開催など、農家の方々が力を合わせ、協力して、自分たちの暮らし方を変えていこうとするのを手助けしたのです。そして見事に誕生したのが、「来ちよくれ竹田研究会」。

平成21年4月に設立された研究会は現在、会員数27名。三田井昇会長のところを筆頭に、竹田12軒、萩1軒、久住4軒、直入2軒、合計19軒の農家民宿が開業しています。

「農業体験をしたい方と交流を深め、その交流から定住に繋げていきたい」「老夫婦の暮らしに他の人が入ってきて、ともに生きがいを感じる」「お客様から元気をいただいている」「田舎がない人に来てもらいたい」など、会員からは前向きな意見が多く聞かれますが、なかにはある女性会員の「主人は民

宿をやる。私はやりたくない！仕事を退職して、やれやれと思っていたのに。皆さんに助けられながら頑張っている」といった声もあります。多くの苦労がありながら、みんなで手を取り合い、自分たちの進むべき道を進んでいる姿に心打たれます。

課題もあります。例えば、インターネット。「今の若い人」は、宿情報を探すのはインターネットです。ところが、研究会の会員で得意とする方は極わずか。ほとんどの方がなかなか使いこなせません。しかし、大丈夫！県立芸術短期大学の学生たちが、皆さんを指導してくれます。今ではホームページやブログを立ち上げているほど。研究会を支援していこうとする様々な力に感謝です。

農家民宿開業希望者は、だんだん増加。かつて言われた「明るい農村」を取り戻す、ひとつの手段です。研究会の会員の方が「うちで採れた食べ物をお代りしてくれるのが一番うれしい」と言っていました。農家の暮らしを体験された人々が、農業に理解と共感を下さり、竹田のおもてなしに「お代り」と言って下さることを願っています。



「来ちよくれ竹田研究会」のみなさん

土居昌弘一般質問



平成22年第3回定例県議会は9月7日に開会し、10月22日閉会の46日間開催されました。

9月15日の一般質問で、私は医療制度改革や児童虐待対策、環境にやさしい農業などについて「地域が抱える課題を把握して、その解決策を示していきましょう」と訴えました。

農地の有効利用を

(土居質問)

農家数は減少の一途。それによって耕作放棄地の増加になっている。農林水産省の調査によれば、現状のままでは耕作に使えない土地は38万6千ヘクタールに上り、食料自給率の引き上げが叫ばれるなかであって、この対策は喫緊の課題。どう取り組むのか。

(県答弁)

耕作放棄地は、県内に約8千ヘクタールある。企業の農業参入や放牧などの解消策とともに、発生防止の取り組みが重要。

本年度からは耕作放棄地再生利用事業や県の新規事業でもある農地利活用推進事業を活用して、耕作放棄地対策を強化したい。

(土居質問)

農地法の改正により、農業委員会による遊休農地対策が強化された。このことがより効果を上げるためには、県や市町村との連携が不可欠。県としてどう連携を図るのか。

(県答弁)

遊休農地対策の業務遂行には、農業委員会、農業

会議、市町村との連携が重要。県としては、確保すべき農用地の目標を定める必要があり、農業委員会との連携を強化したい。

また、農業委員会が新たに担う業務が、適正かつ円滑に行われるよう支援を行いたい。

(土居質問)

耕作放棄地解消・発生防止基盤整備事業は、耕作放棄地を抱える地域において、基盤整備を契機として耕作放棄地の解消を図り、地域農業の活性化を目指すもの。竹田市では今年度に米納地区、今後は片ヶ瀬、竹田南部、そして久住と計画されている。

しかし、この事業は昨年度の事業仕分けで、大幅に事業費を削減された農業農村整備事業のひとつのメニュー。どのようにして予算の確保を図るのか。

(県答弁)

この事業は、耕作放棄地の解消・発生防止に有効なものであり、地域農業の振興、農村の活性化に大いに役立つものと考えている。農地がこの事業で担い手に集積され、活用されることが期待される。できるだけ事業の進捗に支障が生じることのないよう、国に要請していく。



万葉の里城原の現場

土地改良予算を!

議会の総意の在り方

第3回定例会では、議員提出議案で「土地改良事業関連予算の確保を求める意見書」を提出し、私が提案理由の説明をして、他の議員の賛同を願った。残念なことに、全会一致とはならなかったが、賛成多数で採択された。

同じように私が提案の説明をした「地方の社会資本の早期整備を求める意見書」と「大蘇ダムの早期完成を求める意見書」も賛成多数で採択。多数決で決する前に、もっと議員相互の討論が必要だ。

地域を再生させるコミュニティ



(土居質問)

本年度4月に市町村振興課が出した『市町村合併の効果と課題』では、「細かな住民サービスの実施が難しい」「本庁所在地と旧町村部のにぎわいに格差がある」という課題が明らかになった。この課題をどう受け止めるか。

(県答弁)

重要な課題だと認識している。旧町村部対策を始め、福祉、産業振興、防災等、各般にわたる施策の充実に努めるとともに、県がサポートし、地域住民やNPOとの協働といった新しい要素も取り入れていく。

(土居質問)

明治、昭和の大合併が「小異を捨てて、大同につく」という集権的な合併であったとするならば、平成のそれは「小異を大切にして、大同につく」という自治精神を大切にした分権的な合併にしなければならない。

『合併の効果と課題』では、最も住民サービスの効果が上がらなかったのは、地域医療体制の整備と充実。この課題に私たちはどうするのか。

長野県には、保健補導員という地域組織がある。自分たちの健康を守るためには、自分たちがまず学習することが大切だと気づき、活動を始めたという。今では、県内各地で約13,000人の県民が、この活動の担い手となっている。自治の心の成果だ。

県民が自発的に、かつ協調し合いながらコミュニティをつくるのが大切だと考えるが、県の見解は。

(県答弁)

まず、自分の足元を見つめ直し、自ら活動するこ

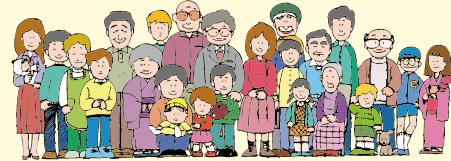


子どもと大人、障害のある人とない人、みんないっしょに生きている―「竹田精神障がい者地域交流会」の年忘れおたのしみ会での竹田じゃんしゃん音頭

とが大事。県では、過疎化・高齢化の進む小規模集落において、集落の自主的な活動を支援している。県下には、核となるキーパーソンと、知識・経験が豊富な高齢者がいっしょになって、地域を何とかしようと活動しているところがたくさんある。

地域の自発的な取り組みを支援することで「地域の底力」を強化し、コミュニティづくりを支えていきたい。

新たな支え合いの確立



大分県では今年度から共助の体制を築くため県下からモデル地区として久住地区、白丹地区、都野地区を選定し、地域の福祉力再生事業にあたっている。「お互い様」の関係を築けるのは、どの範囲のコミュニティなのか。また、そのコミュニティをどう機能させるのか。

失われつつある「人と人とを結ぶ絆」を取り戻し、互惠の関係のなかで、一人ひとりが生き活きと暮らせる竹田市をつくっていかなければならない。



調べる力は議会力！現場はもちろん、議場でも懸命に調査。

産直の可能性 — 儲けるしくみづくり

竹田市アンテナショップ出荷協議会久住地区の研修会に寄らせて頂きました。久住地区の会員の皆さんが、菅生の堀孝敏さんの圃場を視察に行くと言うので、同行。「命の源は土にあり」の言葉ではないですが、堆肥づくりから土づくりまで、安心・安全でおいしい農業を実践している堀さんに、関心、驚嘆、納得。会員一同、拍手喝采でした。



菅生の堀孝敏さんの圃場視察



アンテナショップ出荷協議会久住地区研修会

私の大学院時代の修士論文のテーマは「地域連携と産直」でした。都市と農村との連携のかたちのひとつである、産直に注目。わかば農業公社アンテナショップ事業について、会員や販売員の方々のご協力を頂きながら調査をしました。以来、産直のあり方を研究中。今の課題は「共販と産直の共存共栄」。

さて、昨年、茨城県つくば市の(株)農業法人みずほを訪問。全国直売所研究会会長でもある長谷川久夫社長は開口一番「産直では農業従事者は生産者ではなく、経営者。責任を自覚して元気に働く。そして、農業を立派な産業にして行く」と言い、そのために

は「手段の改善ではなく、目的の再設定が重要」と締めくくりました。

もともと直売所は、クオリティーを追求する販売型式という性格を潜在的に持っています。「少量だけれども、質が良いもの」を人々は求め、直売所に来るのです。この〈量より質〉の観点で、人々が求める直売所の目的をより明確に設定してみても良いでしょう。

堀さんが実践している農業が、その参考です。竹田市クリーン農業推進協議会が進めている「安全・安心で、おいしいものづくり」です。減農薬、減化学肥料で、糖度が高く、ビタミン・ミネラルが豊富、硝酸態窒素が低い農産物。人々は直売所に、質の高い商品を求めています。スーパーマーケットが持っている価値は求めています。ここに特化していくことが直売所の繁盛に繋がるのではないかと考えています。



長谷川久夫氏(左)の「みずほ村市場」

こんしん 渾身! とともに輝く社会づくり



政治とは、情熱と観察力とを同時に持って、堅い板に力を込めて、徐々に穴を開けてゆくことを意味する (マックス・ウェーバー)

私たちは生きていく限り、様々な壁を突破していかなければなりません。今回は農業の課題という大きく分厚い壁の一部を紹介しました。JAの共販の農業を主の産業とすると、産直やグリーンツーリズムの取り組みは従の産業であるかも知れません。が、しかし、従があるからこそ、主が生きてきます。従の課題解決から見えてくる主の課題解決方法もあるはずですよ。

農林業の壁、商工業の壁、医療・福祉の壁、教育の壁…多くの社会的な壁が立ちます。私はそれらときちんと対峙し、的を絞って、力を集中させ、壁全体ではなく、壁の一部、それも針の先ほどの一点に向かって、持っている力のすべてを託して打ち込んで行きたい。そうすることによって、壁は突破でき、ひとり一人が生の実感を感じられる社会になっていくと信じています。

土居昌弘